

経済・金融 フラッシュ

ロシア GDP(2021年4-6月期) —コロナ禍からの回復が継続

経済研究部 准主任研究員 高山 武士

TEL:03-3512-1818 E-mail: takayama@nli-research.co.jp

1. 結果の概要:前年比では10.5%の大幅成長

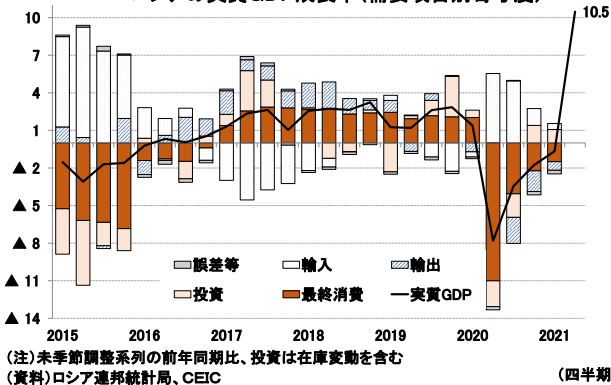
9月10日、ロシア連邦統計局は国内総生産（GDP）を公表し、結果は以下の通りとなった。

【実質GDP成長率（未季節調整系列）】

- ・2021年4-6月期の前年同期比伸び率は10.5%、予想¹（同10.3%）から上振れ、前期（同▲0.7%）からマイナス幅が縮小した（図表1・2）

（図表1）

（前年同期比、%）ロシアの実質GDP成長率（需要項目別寄与度）



（図表2）

（前年同期比、%）ロシアの実質GDP成長率（供給項目別寄与度）



2. 結果の詳細:コロナ禍の影響は引き続き減少、インフレや金利は今後の経済の重しに

今回の結果は、8月13日に公表されていた予備推計値（10.3%）から上方修正されている。ロシアでは20年4-6月期の成長率がコロナ禍の影響で▲7.8%と大きく落ち込んでいたため、21年4-6月期はベース効果により10.5%と高い成長率となった。コロナ禍の影響がなかった2年前と比較すると21年4-6月期は2年前比1.8%（1-3月期は同0.7%）だった。

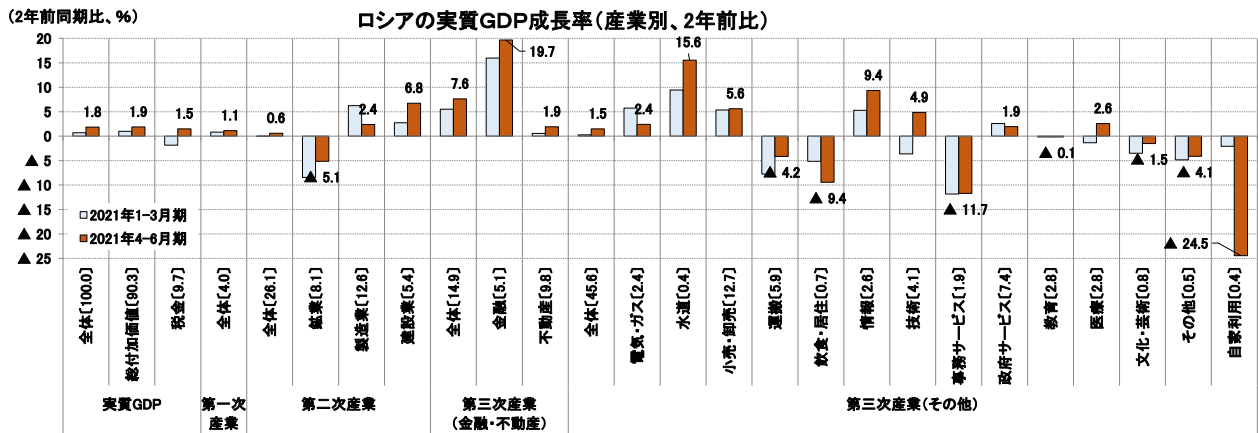
産業別の伸び率を2年前比で見ると（図表3）、大分類では第一次産業・第二次産業・第三次産業のいずれもプラスとなっている。中でも第三次産業（金融・不動産）は2年前比7.6%と高成長でコロナ禍後の回復をけん引している。より細かい産業分類では、「自家利用²」が▲24.5%「事務サービス」が▲11.7%、「飲食・居住サービス」が▲9.4%とマイナス幅が大きい。また、「鉱業」も▲5.1%とマイナスが目立つ。

¹ bloomberg 集計の中央値。以下の予想値も同様。

² 自家利用の財・サービス。便宜的に第三次産業（その他）に含めた。

一方、季節調整系では4-6月期は前期比3.5%（1-3月期1.0%）と成長が加速、コロナ禍前との比較では3.1%（1-3月期▲0.3%）となり、コロナ禍前のGDP水準を上回った（図表4・5）。

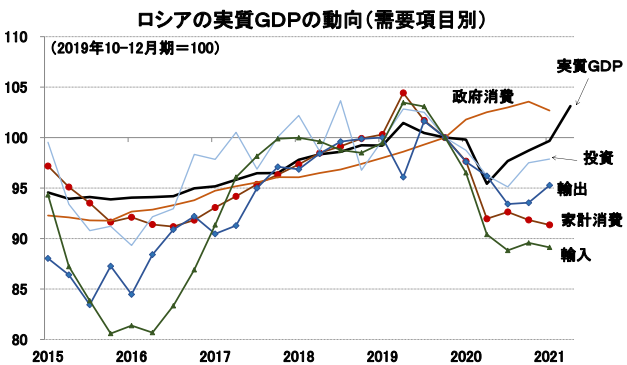
（図表3）



（注）未季節調整系列の2年前比、[]は2020年の実質GDP全体に対するウェイト、産業分類伸び率およびウェイトは筆者による試算
（資料）ロシア連邦統計局のデータをCEICより取得

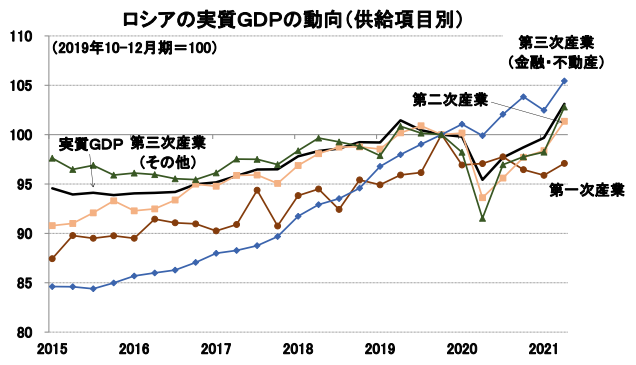
産業別の前期比では、「飲食・居住サービス」が23.1%と大きく伸びている点が目立つ。同産業は2年前比では大幅マイナスだが、季節調整値ではコロナ禍直前の19年10-12月期の水準を超えており、4-6月期にはコロナからの回復も進んできたと言える。

（図表4）



（注）季節調整系列の19年10-12月期を100として指数化、各項目は21年1-3月期まで
（資料）ロシア連邦統計局のデータをCEICより取得

（図表5）



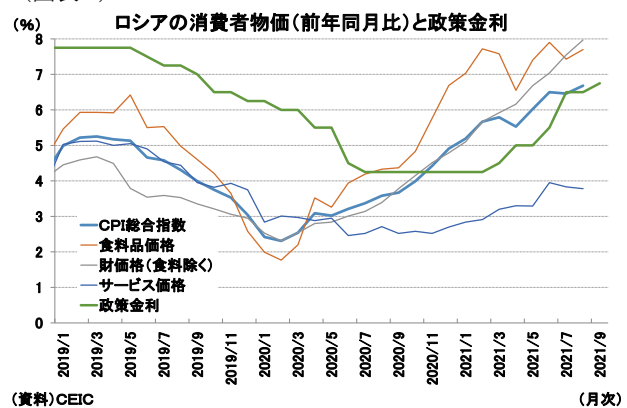
（注）季節調整系列の19年10-12月期を100として指数化
（資料）ロシア連邦統計局のデータをCEICより取得

足もとの状況を概観すると、原油需要に関しては、OPECプラスで協調減産縮小（つまり増産）

を8月以降も22年12月まで継続することに合意しており、今後も段階的な生産増が見込めるため、鉱業生産については緩やかながら回復が継続しそうである。一方、国内のインフレ圧力は上昇が続いており8月のインフレ率は6.7%、食料品や財価格の上昇率は8%近い状況にある

（図表6）。中銀はインフレ率が目標（4%）を大きく上回るため、政策金利を6.75%まで引き上げており、これはコロナ禍前の2019年9月の水準（7%）である。ロシアでは、新型コロナを抑制するための各種経済活動は再開されつつある一方で、高インフレによる実質所得の減少や投資の減速も懸念される状況と言えるだろう。

（図表6）



（資料）CEIC

（お願い）本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。